

「身体の声聴く」という方法と、その結果から生まれる実践

—「身体の声聴く」ことから実践へ；触れる、共感、分析、実践の仕組み
「弱い思想 *pensiero debole*」からの接近；ケア行為による、生命活動の賦活
〔非主体・非時間から主体化・「生きられた時間」への再生〕

似田貝 香門

東京大学名誉教授

東京大学被災地支援ネットワーク〔代表幹事〕

《参考》

「身体の声を聴く」という表現は、ネグリの「哀しみの定式化」での説明のものを借用した。

Antonio Negri (2002 = 2004、Job, La Force de L'Esclave. traduit de l'italien par Judith Revel, Bayard, 2003。邦訳『ヨブ』 p.84)

0. 社会学から〈渦〉現象をどのように接近するか

- 〈渦〉という現象（運動）を、社会現象（とりわけ社会運動）の複雑な様相を把握するmetaphorとして捉え、このmetaphorの作用を応用する、という形で対応することにしたい。
- 〈渦〉のmetaphor作用を導きの糸として、次のように展開したい。
- 〈社会事象の特異な動きを、ミクロからマクロにわたる、変化・変動と社会構造変化を一つの過程的運動として了解〉する、ための手段としての概念（＝索出的概念）として使用し、これによって私たちの当該の研究対象の記録、表現、記述を可能にすることができると、思うからである。いわば、〈渦〉という現象（運動）を「渦動論」という系から社会変動を捉えなおしてみよう。

新たに出現した出来事が(これを〈ミクロ出現〉と呼んでおく)、新たな主体によって意味づけられて(潜勢的主体の出現)、社会的現象として顕在化し、それが社会的力(形と力)を得たときには、社会の制度や秩序、構造を変化させていく

〈渦〉という一種の様相概念を用いることで、いわば「点」や「線」に還元することが不可能な、時間とともに変化・変転・変移・転位する特異性、新たな出来事・事柄の生起、既存の出来事・概念の展開、周辺や外部の異質な要素を「寄せ集め」、それら異なる位相を同一の運動へと包摂し、動態的・複層的、多系的な組織化によって「統合」された多様性、多価性の世界を創造する、これらの「形」と「力」の実相を把握することができれば、異領域の研究の相互浸透を可能にする新しい道具概念の提示、および人文・社会系の方法論の開拓となる。

〈渦〉とは、メタファーとして捉えるならば、規則と不規則、近さと遠さ、求心と遠心、巻き込みと排除、秩序と解体などの相反する要素および動態的特徴を束ねる表象である。

諸実践の「巻き込み」による社会変動の展開過程と社会の組織化

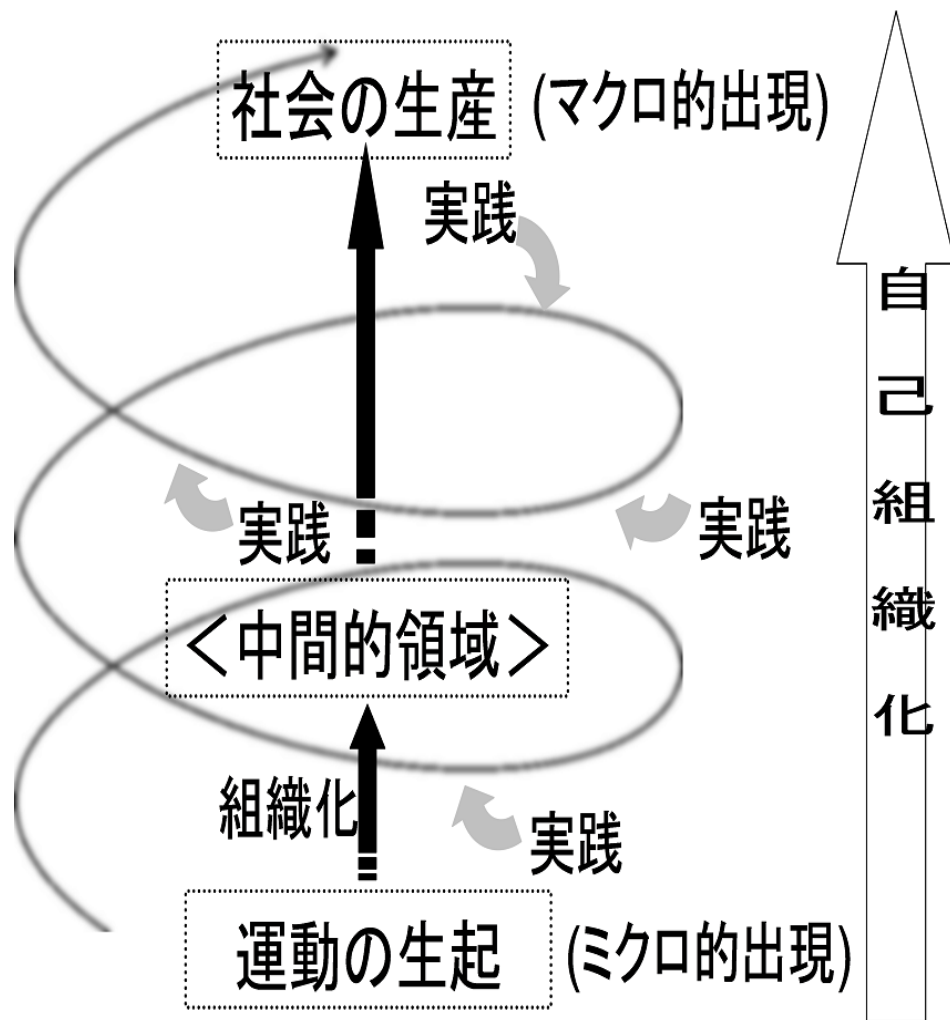
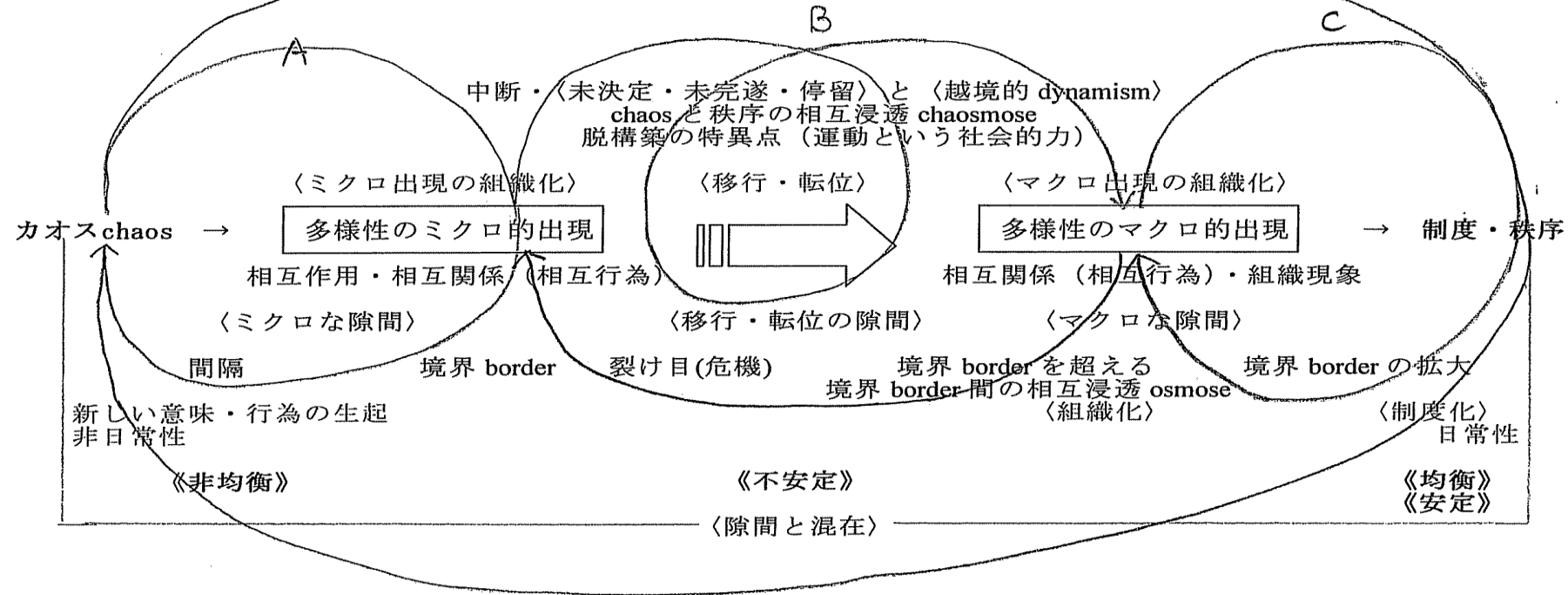


図2 「多様性の出現の過程〔渦巻きのループ運動〕」



- A ミクロの過程＝循環 〈ミクロな隙間〉は受難 (chaos) によって余儀なく主体化される場である。
 B 移行・転位 (形成→変形)
 C マクロの過程＝循環
 D 再生産の過程＝循環

カオスから制度・秩序への変化〔〈移行・転位〉〕は、主体論では、新しい 固有の座標〔振る舞い方の倫理基準〕によって、「横断的に」自己を根拠づける〈自己共存性 auto-consistance〉を形成していく、プロセス的主体の発展と言うことができる。

- ✕「渦巻きをめぐる藤原（咲平）先生の集積原理は、生命の原理であるが、非生物にも似たことが起こる可能性です。これはベルグソンにもウィーナーにもない点です」（渡辺 隼）
- ✕生命系も、非生命系（物質や社会）も、差異や、多様なものが、最初は微細的な現出であっても、条件を得れば、次第に、他の差異や多様性を「巻き込み」ながら、一点ないし複数にの中心部、テーマ、課題=土俵（アンジュ）、問題）に、寄せ集められ、集積し、一つの力（energy、・power）を生み出していく、という「渦動論」の考え方は、社会の変動・構造を考えていく動態論としては興味を引く。

ノーバート・ウィナー (Norbert Wiener) の非線形振動の「引き込み entrainment」現象という着想は、私がテーマとする異なる主体間の、co-presence、〈共同出現〉の生成について、大きなヒントを与えると思われる。

以下のように予め、視点の移動をはっきりさせておこう。
物理現象としての、共振や引き込み entrainment という現象を、可能な限り生命現象という方向へ移動させ、その上で、人間相互のコミュニケーションに広げたい。

ウィリアム・コンドンのエントレインメント; コミュニケーションする二人の人の身体のリズムが互いに同調しあう生理学的事実を明らかにし、そこから、二人ないし、それ以上の人間の間のリズムがかみ合っているとき、つまり共調しているときに起こるプロセスに対して「エントレインメント」という用語をあてた。→「共振」、「共感」

問題意識：「身体の声聴く」という行為の生命活動の再生と力動性

- 物理現象から生命現象へ（共振 引き込みentrainment）
- 人間相互の共振によるコミュニケーション
- 精神医学者E・ミンコスフキー（『精神のコスモロジーへ』1936＝1983 人文書院）の「**生きられる時間**」のなかの現実との生命接触の回復を主張する際、反響を重視。
- 「共振」はダイナミックで生命的カテゴリー
- 反響とは独特の仕方である空白を充たすこと。
- **充たすことは生命体そのものの力動性の働き。**
- **力動性との出会いは、生命を反響させ、生命独特の世界を充たす。**
- 「生きられる時間」のなかの現実との生命接触とは、E・ミンコスフキーによれば、「同調による振動」つまり「共振」に他ならない。
- **共振と共感 いずれも他者との（物、自然、人間）との一体化のテーマ。**

1. 「つぶやき」の経緯

足湯ボランティア活動と「つぶやき」メモ



ROAD プロジェクト足湯隊 つぶやきカード			
き取り者名		ユリ年 7月6日 (木)	
き取り場所	米崎小学校仮設		
性別	年齢(何歳代)	名前・あだ名(分かれば)	
つぶやき	仮設に入、たけい。くたがらヤサキなよぬ。こっ前見目ツッ人た 「さうせみたい」を言、たて「あ、そうすか。たて(笑)。 おお8kg重、たつとタビトナ。おった。 そっ地下に洋服が落ちて1月取そろえてたから、服がなくて、 たかたか着替けてもごんない。 和装の服は若い子向けらしい。刀割の着るもない。		
備考・感想	おれ、たけい。笑顔で「あ、そう、ええ。でもごん着るが、おれは着る、かわる もごんたまろ。		



9082

ROAD プロジェクト足湯線 つぶやきカード

聞き取り者名		23 年 7 月 5 日 (火)	
聞き取り場所 <u>金沢市体育館 2 階事務所</u>			
性別 <u>男性</u>	年齢(何歳代) <u>60~70歳代</u>	名前・あだ名 (分かれば)	
つぶやき ・母の心と娘が遠くを歩いた。津波は木村に一番、おれは初めだ。 ・家は満員で、すぐそばにうけつけがある。たが、夕方に。 ・この避難所に来た4月。早く仮設に移したい。なかなかならない。 ・避難所では90年を越えている。隣の省と隣の省(津波)は19年。自分たちが70年経ちたのと同じ。津波のせいで100年経たない。24は77年。バカバカしい。(おれは) ・このおれは人肉を食っている。早く自分の息を吐き出さないと。			
備考・感想 このおれは100年経たない。津波に生き残ったのが多かった。同じ被災者でもおれは遠くを歩いた。おれは100年経たない。津波のせいで100年経たない。おれは100年経たない。			

「つぶやき」データ

- 期間：2011年3月29日～2012年11月11日
- 聴き取り者名／日付／聴き取り場所／性別／年齢／名前／つぶやき…備考・感想
- **15145個**のつぶやきを量的・質的に分析
- **延べ2000名のボランティアが記入**(厳密には被災者の言葉そのものではない)
- 名前の欄はほぼ空欄なので、実質的に**匿名データ**

20120316ashiyu (version 1).xlsb [自動保存済み] - Microsoft Excel																	
ホーム 挿入 ページ レイアウト 数式 データ 校閲 表示 アドイン Acrobat																	
改ページ プレビュー			ルーター			数式バー			新しいウィンドウを開く			作業状態の保存			マクロ		
ユーザー設定のビュー			枠線			見出し			整列			ウィンドウの切り替え			マクロ		
全画面表示			メッセージ バー			表示/非表示			ウィンドウ枠の固定			マクロ			マクロ		
ブックの表示									ズーム			ズーム					
									100%			選択範囲に合わせて拡大/縮小					
E2																	
F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U		
月	日	聞き	足湯実施場所	性別	性別	年齢	年代	名前	つぶやき	備考・感想	メモ	1	2				
6	8	78	陸前高田	1	1	男	85	80代	私は 毎朝3時半に起きて避難所	この 辺の 長老という感じの 世話焼きの方で、被災され		1	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	4時半から炊き出し 当番なんで 避難所	にいると何かと大変で早く仮設に入りたと思		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	(仮設住宅で) 節約のためにエ	いろいろあきらめてる感じでした。仮設住宅なので、		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	電気代節約してるんだよー。畑	家にカギをかけてなくても隣の人が 亜れか分からな		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	1	男	70	70代	仮設は 暑いんだあー。がれきて	ぼつりぼつりとしゃべってくれた。男の人はくるぶしソ		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	50	50代	家が残ってるから寝るときだけ	家が片づけられていなく、いられないそうなので、洗		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	仮設住宅に入ってもう3週間か	仮設住宅の 不安が見えるような会話でした。また、知		0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	仮設に住んでいる。仮設は(プレハブなので)かなり暑い。エアコンはついてるが、			0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	80	80代	仮設に5月中旬に入った。1人	ご家族が被害にあわれて寂しそうな表情だった。		1	1				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	さんまの加工工場に勤めてたのよ。白い帽子かぶって。ゴつい手でしょ。ここの仮設			0	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	まさかこんなねえ。ふと涙が出	お一人なので寂しいと言っていた。でも明るい方で元		1	0				
6	8	78	陸前高田	1	2	女	40	40代	もう1度津波が来て元の状態に戻してくれればいいのにねえ(笑			1	0				
6	8	78	陸前高田	1	1	男	86	80代	嫁が俺を避難所に連れて来てくれてその後貴重品を取りに戻ったまま・・			1	1				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	カキむぎの仕事をしていた。28年間。10月に種付したカキがすべてだめになった。ワ			1	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	全然お風呂に入れなかったか	足湯をすると「気持ちいい」と言って喜んでくださいまし		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	肩、腰、足ががたがた。家は	大避難されている方じゃない方でもこういった体の 不自		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	仮設は 水出るよー。なんもすることないのよー。			0	0				
6	7	78	陸前高田	1	1	男	70	70代	農作業も出来なくて暇だあー。色んな人が来てくれて感謝してるよ。			0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	70	70代	まだ魚のにおいがきつい。お孫	うれしそうにお孫さんのお話をしていた。		1	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	3か月もたってっけど、仮設は	避難所の 目の前が仮設住宅というのは、避難所生活		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	1	男	40	40代	いや歩いたなあ。ぼつ悪いな	ご自身も避難所に居住されながら、地域のボランティア		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	足湯3回目	無口な人でした。		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	遠野はジンギスカンが有名だよー。稲の成長が北部より内陸の方が早いんだよねー			0	0				
6	7	78	陸前高田	1	1	男	87	80代	ゴルフが趣味。仕事をしていないので、パソコンをやっていたんだけど、流されてしま			1	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	63	60代	お風呂に1か月くらい入れなか	元気な人だった。		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	1	男	60	60代	市役所は全部流されて職員の	今はお礼とか考えなくていいと思います。できるときに		1	0				
6	7	78	陸前高田	1	1	男	65	60代	市会議員になって9年目。今年	の4月に回線だったけれど、多分来年の5月になるだ		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	30	30代	普段45度くらいのお湯に入って	仮設に移られても、体調などが悪くなっていないこと		0	0				
6	7	78	陸前高田	1	2	女	60	60代	布団じゃないから眠れないよ。生活環境が不十分であることを少し話された。強い不			0	0				

作業過程における分析方向の変化

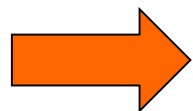
気になるつぶやきの発見(入力時)

- 夜、眠れない
- 被災時のことを思い出してしまう
- 仮設ですることがない
-



現場に繋ぐ必要

- 仮設支援連絡会で提言
- モデル地区として七ヶ浜とモビリア



被災者・支援者の心の問題(ケア専門職)との連携



「ガイドブック」づくり

協定書



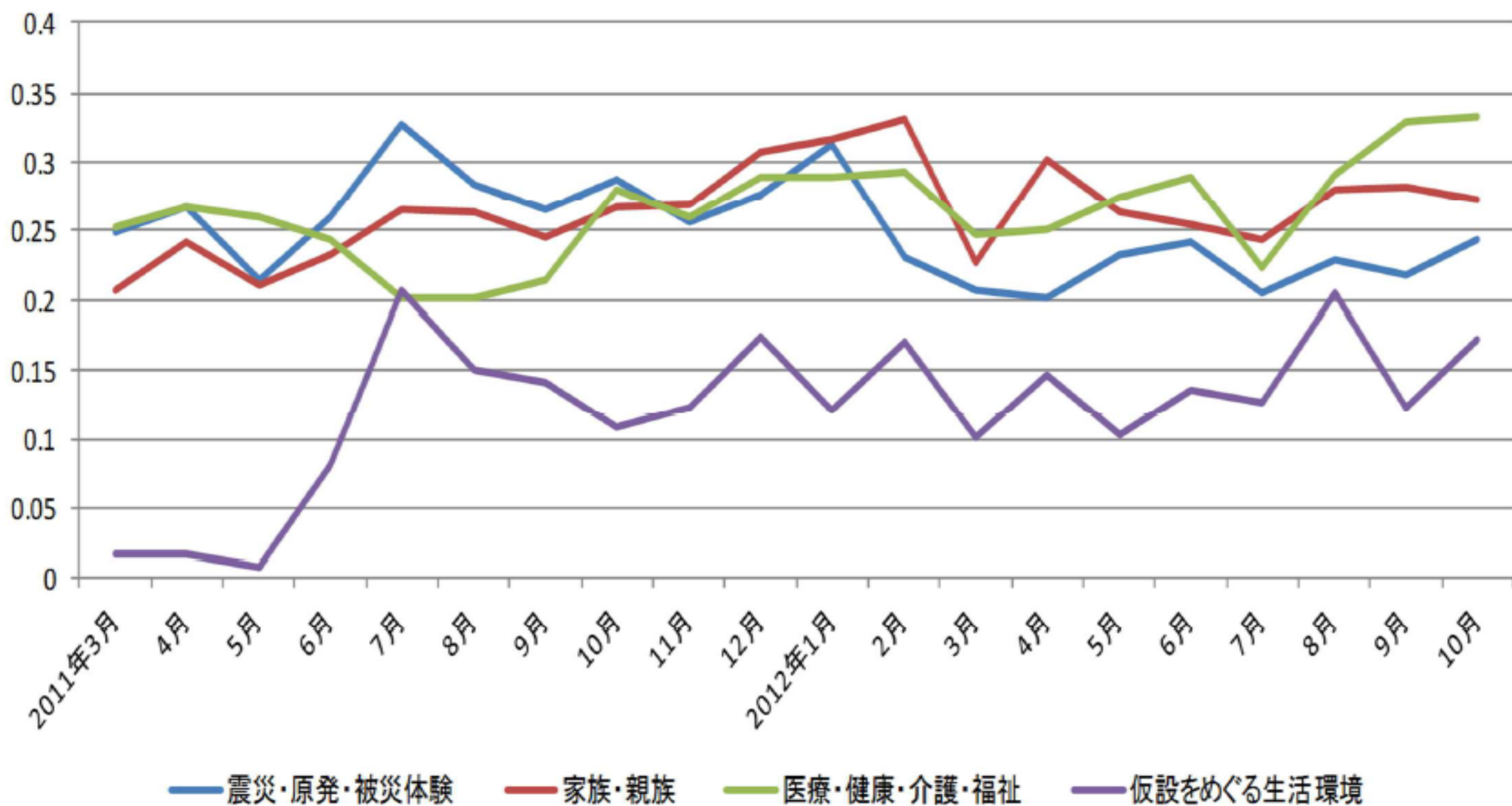
個人情報問題

つぶやきの分類項目

(つぶやきを下記の25カテゴリーに事後分類)

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 震災・原発・被災体験 | 14 仮設をめぐる生活環境 |
| 2 生死 | 15 まちづくり・復興計画 |
| 3 放射能 | 16 将来設計 |
| 4 医療・健康・介護・福祉 | 17 娯楽・趣味 |
| 5 家族・親族 | 18 することがない |
| 6 近隣・友人 | 19 教育・子育て・学校 |
| 7 動物・ペット | 20 土地柄(地域自慢) |
| 8 仕事・生業 | 21 個人史・生きがい |
| 9 金銭・生活費 | 22 世間話 |
| 10 土地・財産・家屋 | 23 足湯 |
| 11 買い物 | 24 ボランティア・支援 |
| 12 交通・移動 | 25 避難所をめぐる生活環境 |
| 13 衣食・生活物資 | 99 該当なし |

2. 「つぶやき」の第一次分析の結果



「つぶやき」の第一次分析の結果

- 1) 足湯ボランティア活動への感謝への言及の頻度が高い
 - 2) 時間的経過による「つぶやき」の内容(25分類)に、大きな変化といえるものはない。
- 1)と2)から、
- 「つぶやき」という独自の発話の形式を読みとる必要がある**
- 3) 苦しみ(pathos)や生きようとする決意の気分や感情・悲嘆の反応(怒り、事実の否認、後悔や自責の念)、時にはこれらは不眠や食欲不振という体調不調を伴う、落ち込み、自責の念、罪責感、怒り、落胆、他者への羨望など、それらが絶え心の中で大きく揺れ動いる

「つぶやき」分析からの実践性と足湯活動の存在意義

「つぶやき」の分析という行為は、

1) 文字媒体(text空間)を、

今ひとたび、被災現場fieldの緊要なテーマ性や実践性、被災者や被災地へ戻していく作業

2) また、1)によって、

・「つぶやき」をボランティアが記録し続けている意義の再確認

すなわち、記録(ボランティア)→分析(後方支援の研究者); 解決されるべき現場fieldのテーマ、課題の提案→現場fieldで解決すべき仕組みの組織化

足湯ボランティア活動の存在意義を再確認

・足湯ボランティアの活動へのアイデンティティの形成

・また分析者にとっては、この特異な活動の検証*として、現場に実践的テーマとして戻していく役割の後方支援という支援の〈実践知〉の獲得

3. 生成されテーマ（実践課題・理論的課題）

分析から生成した2つのテーマ；

分析から見えてきたことは、

- 1) 「つぶやき」という発話行為は、**被災者の自律（能動性）の前兆**
- 「被災者」が自分の意思で「つぶやく」（目の前の足湯ボランティアという、他者への発話parole行為）こと
 - それは**被災者の自律（能動性）の前兆**ともいえる。

2)「共感」という方法

- 被災者の苦しみ、哀しみ、受難、痛みの状況を、他者は、知ること、理解すること、まして了解することは困難である (Wittgenstein)。
この苦しみをどのようにして、他者に伝達することができるのか(→ **足湯活動効果**)。
- 生きる力(自存力conatus)は、苦しみ、哀しみ、痛みのなかでも、創設される。
「共感」を介して、人間の関係性の存在論を認識させ、生きる力とは、存在論的な時間の問題であることを理解することが大切。

1)「つぶやき」という発話行為は、被災者の自律（能動性）の前兆

(1)「つぶやき」とは何か

①身体の「触れ合い」

- ・ ボランティアは、足湯を希望した被災者の足を湯につけ、そして手の指を一本一本もむ。そして手のひら全体をもみほぐす。前腕、上腕をもみほぐす。
- ・ 身体の触れあいが発話paroleとしての「つぶやき」を生む

図1. 身体の「触れ合い」による発話行為「つぶやき」

被災者が、自らの身体を他者に〈触れさせる〉



身体感覚の開放感、安心感



心に深く閉ざされていた苦しみを、言葉となつて打ち明ける



発話行為「つぶやき」

図2. 足湯ボランティアが〈聴く〉という応答

足湯ボランティアが「つぶやき」を聴く



両者に〈「語る」－「聴く」〉という心の
コミュニケーションの形成

→その瞬間に、被災者は、単なる多数の匿名の被災者として扱われていないと感ずる

〈生の固有性〉

各自が、固有の持名を持ち、これまで生きてきた個人として、しかし今回の災害に遭ってしまい、苦しみを背負ってしまった、そのような一人の人としての被災者である自分が今、他者たる足湯ボランティアに「受け入れられている」、と実感

② 他者との〈出会いrencontre〉の場

- ・このような意味で、被災者にとって足湯活動の場は、ボランティアという他者のサービスを身体として受け入れる場
- ・同時に、ボランティアにとっても、一人の苦しみを背負った人（他者）との出会いの場となる。
 - 足湯ボランティアが、被災者の「つぶやき」を〈聴く〉という応答関係が生成されてはじめて、ボランティアと被災者は一般的な、相互匿名的な関わりでなく、お互いに〈生の固有性〉もつ、一人の人間として関係が生成される。
- ・足湯ボランティアの活動場は、こうして相互の**他者との〈出会いrencontre〉の場、歓待hospitalitéの場を生み出す実践空間**
 - そのような場が足湯の場である。

《参考》

〈出会いrencontre〉とは、人が思いがけなく新しい課題、テーマに邂逅し、それを受け入れ、迎え入れる経験。こうした経験によって、ひとは外部に自己を開く。自立困難な、さまざまな条件やテーマ・課題を抱えた人と支援者が邂逅し、その結果、やむなくその人と応答関係を引き受けざるをえない出来事。このような、新しい出来事や新しい行為との〈出会いrencontre、rencounter〉は、具体的諸個人が、偶然に、あるいは否応なしに、または避けることができない状況で、絶えず支援の現場へと立ち会わせ、そして余儀なく自らの主体を開かされる出来事（似田貝.2008,2011a.b）

〈歓待hospitalité〉

主（ボランティア）が客（被災者）を一方的的に「受け入れ」るのではない。客が潜在的「受け入れ可能性」から有している、という条件があり、結果として、双方向的な「受け入れ」が成り立って、初めて歓待hospitalitéの関係性が成り立つ。

(2)被災者の《身体の変化》と《こころの変化》

①他者の「受け入れ可能性」の潜在性

ところで、身体感覚の心の動きである、開放感、安心感とは何であろうか。足湯活動を受ける被災者にとって、どのような心の変化が起こるのであろうか。

- ・足湯の現場に来る被災者は、他者であるボランティアに、自らの身体を「触れ」させる活動を受け入れている。
- ・このような被災者のふるまいは、**他者との関わりという関係性(対他関係)の、「受け入れ可能性(acceptation)」**(J.Derrida 1997=2004)を潜在的に有している、といえる。

②身体に「触れ」ることによる生命活動を呼び覚ます基礎

- ・身体的「触れ合い」は、発達心理学のハーローの実験や、動物行動学のローレンツの「共感の整体学」を引き合いに出すまでもなく、
「触れ合い」は生命活動を呼び覚ます基礎

→身体の微妙な変化

こころの「ゆらぎ」からの解放と活動、

図.3 身体の変化（身体の触れあいと心の自律）

足湯活動（他者による身体の「触れ合い」）



被災者の生命活動の賦活
被災者の奮う生命（「内部生命」）



少なからず生ずる自己変化

足湯活動空間で生起する「つぶやき」の中間的総括

- ・足湯の空間での生起する「つぶやき」という事は、感性(身体)間の対話が基礎的である
- ・人間にとっての本当の「力」とは、感覚が豊かであること、体のなかの微妙な差異を感じとることができること、そして自己をしっかりと捉えるという動きの微調整を行えることが、自己再生の一つの原型と考えられる

2)「身体の声聴く」(Antonio Negri)

(1) 自己の「身体の声聴く」; 自己内対話(対自関係)

- ・ ころの変化に敏感に反応する形との一つが、
自らの身体の差異を感じ取り、まずは自己に発話
- ・ 誰にも語れず、深くころに閉じ込めてしまった自己が、
哀しみや苦しみ(pathos)を受けたというありのままの
状態を事実として受けとめる。
隔たりのある自己(差異)を認め、異なる自己との同一化
- ・ 自己同一化できない場合、再びころは閉ざされる

(2) 傍らにいる他者への「ことば」としての発話

- ・現に在る自己の存在状況を、自己にそして傍らにいる他者に、ことばとして発話行為が「つぶやき」

「つぶやき」はこうして、

- ・自己内対話による自己の存在状況確認（自己関係）と他者への発話（他者関係）という二重性を帯びている。

→対自関係としての精神の動きであるとともに、対他関係のふるまい

(3) 自己への関心と他者への関心

- ・被災者にとっては、自分の「身体の声」を聴く
 - 被災者が自己に関心を寄せる（自己への関心）
 - 震災前の自分と、被災後（そして「ここでいま[hic et nunc]）の自分との〈隔たり〉（差異）
- ・そのような自己を、他者にも関心を持って欲しい（他者への関心）

足湯活動によって、

- ・ 先ず被災者は自らの「**身体の声**」を聴き、それが発話行為（つぶやき）となって、寄り添っている目の前の他者である足湯ボランティアへの語りかけとなる。
- ・ これは、「**触る**」を介しての「**奮う生命**」の鼓動が動き始め、震災前の自己と、その後の自己との、**大きな隔たりある自己（差異の認識）との身体間の対話**である。
- ・ それにより、自己への関心とともに、そのような存在としての自己を、他者から無視されたくない、無関心で置かれたくない、という他者からの関心を惹起したいと願う（自己関心＝他者の自己への関心）。

つぶやき：独り言（擬音語・擬態語）

「つぶやき」はこうした「身体の声」を自己内への叫び（叫び声、泣き声、呻き、笑い等の擬音語）、唸りという擬態語や、自己ないし他者に発することば、となつて放たれる。

* 足湯ボランティア「つぶやき」では、「ことば」として発せられた 感動詞の頻度の高いのは、
「うー」「あー」「ああ」「あっ」

《参考》

野口三千三(1996)は、「ことば」の本質は独り言(内言)であるという。

身体の変化により、そのことを表す「初源情報」が、「ことば」

つぶやく; 自己をそとへ発露する

- 受難に遭った自己を、他者にも関心をもって欲しい、無視して欲しくない

→ 自己への関心を外側に向ける＝他者への関心

- 対自的關係としてのこころ(精神)の動きであるとともに、対他的關係のふるまい

被災者にとっては、かつての生活環境の全面的欠如と言う状況、絶望的な震災前後の**自己の隔たり(差異)**という距離**の状況の中で、自己との闘い**が始まっている。

かつての自己と震災後の自己、震災後の自己と現在の自己間で、その違い(差異)を自己同一化する事への抵抗。

それが足湯ボランティアとの関係によって(**他者との出会い**)、**自己の中で、受難した過去を圧縮し、現在と未来を見渡せるような状況**になったとき、

時間は、「生きられる時間」となり、生の賦活、奮い立つ生命が呼び出される。その時、別様な生き方への思考が可能となる。

《「つぶやき」の暫定的総括》
足湯という**身体的「触れ合い」**は、
こうして被災者自身の**「身体の声
を聴く」動きに作用し、「つぶやき」**
という独自の発話parole形式を生
み出す。

自律の前兆

このように考えると、
哀しみや苦しみ (pathos) のなかにある
被災者の再生の前提は、
なにより、被災者が身体的な感性を取り
戻し、そのことによって人としての自律
力を生み出すことではなかろうか。
→ ここでの「自律」の前兆

《参考》

似田貝香門編、『自立支援の実践知』（東信堂）では、支援者の黒田裕子の実践のEpisodeをを例示しながら、以下のように指摘した。

「生活を整える」という支援の実践は、被災者の**生活意思の持続を自覚的に回復**させる（これが自立）、支援の語りかけである。〈生の固有性〉に関わる自立への支援とは、こうした支援者（他者）による、被災者の「内部生命inner life」（西田幾多郎）としての自己への働きかけを、意味する。そこには〈生の固有性〉のというかけがいのない生命＝生活こそ、人を人ならしめる、という生命の思想が根底にある。P.フレイレのいうエンパワメントempowermentとは、このような意味なのであろう。他者との〈出会いrencontre〉による当事者の「内部生命inner life」への働きかけによって、生活意思を回復し、持続しようとする意思を復権させることに、〈生の固有性〉をめぐる根源的公共性がある。「内部生命inner life」という概念については、西田幾多郎（『全集』）参照。

《こころ〔精神〕の自律》と社会の中での主体としての《自立》との弁別と複相性

ボランティアにとっての自己関係・他者関係

足湯ボランティアにとっては、能動的な活動としての足湯活動の結果、思いがけず被災者の「つぶやき」聴く（傾聴）、という受動的な立場に置かれる。

被災者と自己との〈隔たり〉の大きさを知るに至り、自己が自明と思っていた現存在の平穏性を認識する（自己への関心）。

あらためて苦しみ（pathos）の中にいる被災者との差異を認識する（他者への関心）。

そこから、被災者のおかれている状況への「同一化」という最初的情動が生まれる。それはいわば、自他未分の精神状態の精神作用といえる

4. 方法態度として生成されたテーマ 「つぶやき」分析から得た「共感」という方法

3.方法態度として生成されたテーマ 「つぶやき」分析から得た「共感」という方法

先に述べた、「人間にとっての本当の「力」とは、感覚が豊かであること、体のなかの微妙な差異を感じとることができること、そして自己をしっかり捉えるという動きの微調整を行えることが、自己再生の一つの 原型と考えられる」。

このような感性を基にして方法的に高められてきたのが「共感」という方法である。「共感」とは、自己の内部感覚としての「触」の感覚へまで立ち返って、対象との関係を直接に捉まえる認識の方法である。「共感」を深める、広げるとは、自己の内部的な「人間的自然」を解き放ち、自己の根源を直接に実感する営みのことである。それは、出来事や他者との出会いによる、自己内部感覚での自己の差異に敏感に反応するとによって生ずる、こころの「ゆらぎ」、不安定さ、からの解放の行為である。

したがって「共感」が成り立つのは、なによりまずはこのような自己への関心である。こうした対自関係を、花崎皋平(1981)は、「共感と自己への関心とは表裏一体のものである」(p.54)、と指摘した理由もこのような行為を指しているからであろう。

1)「共感」という方法

(1)被災者の「自己への関心」

- ・「共感」という人格的精神作用は、こうして、自他双方の「自己への関心」

→他者に無視されたくない＝他者関心)の結果、**内外の自己の差異(他者との差異[へだたり])**を起点として、**他者への同一化(他者関心)**という相互作用の結果、生まれてくる。

- ・それを惹起したのがボランティアの**身体への「触る」癒やし行為**で有り、それを受けた**被災者の「内的生命」**の揺り動かしてあったとえよう。

(2).ボランティアの共感能力

- ボランティアは、被災者が発する「つぶやき」から、彼らの「身体の声」を読み取り、了解しようとする。
- その方法が「共感」(他者への共感能力)
- この方法は、被災者の「つぶやき」や身振りから、当事者への関心を高めていく。
- それは同時に共感能力の取得であり、それを瞬時に駆使して、
- 「身体の声」を聴き届けようとする

2). ケア

- ケアとは、このように、相互的行為が生まれたとき、有効にその作法が作用するといえよう。
- こうして、こころの通う相互作用は、身体的「触れ合い」と「つぶやき」をとうして、人が次をめざして立ち上がる前兆としての、自律の根源を相互に呼び出す。
- 不幸、受難、苦しみ (pathos) のどん底にあるとき、ひととひとが、直に身体的に「触れ合い」とき、ひととしての生命活動の回復を伴う、
本源的な意思疎通 (交信) となり得る、ことば (「つぶやき」) が紂だされた、といえる。

3)「共感」; 多様性の中で実践される 根源的コミュニケーション

したがって、「共感」とは、

自他の身体間の対話という、人間的な経験
にとって根本的なコミュニケーションの基礎
を、かたちづくる。

被災者の苦しみ、受難は、こうした人間関係
を通して、対話者間の差異(多様性)の中で
認識される。

「つぶやき」分析を介して得た、「共感」という方法の暫定的定義；

- ・対自関係と他者関係という、双
方的視点、あるいは自己対象化
と主体化の相互的うながし

《補足》;

ウィリアム・コンドンが歴大なスローモーション・フィルムを調べて実証したように、**身体間には「引き込み」現象がある**。彼の観察によれば、言葉の話し手の身体は、自分の言葉に合わせて微細に動いている(自己同期性)。そして聞き手の身体もまた、話し手の身体と全く同じリズムで動いているのである(相互同期性)。「譬えて言えば、聞き手の全身は話に伴って正確にまた滑らかに踊っていた」のである。この「**相互同期性 interactional synchrony**」をコンドンは「**引き込み entrainment**」とも呼んだ。この「引き込み」は当事者には意識されない。しかしこの「引き込み」によって話し手と聞き手は「ノリ」を共有し、話題への身構えを共有し、理解しあえたという気持ちになることができる。

自己同調(自己への引き込みentrainment)に始まり他者を引き込む。引き込みentrainmentができないと云うことは、関係が持てないと云うこと。対話的コミュニケーションの基礎に「引き込みentrainment」が不可欠。

《参考》

「共感」; 私は、阪神・淡路大震災での支援者の活動を通じて、**感応力(働きを受ける能力)、活動力(みずから 働く力能)**という概念を使用しながら、以下のように暫定的に定義した。

経験的に裏打ちされた理念的定義ですが、対象(他者)との〈「語る」―「聴く」〉という関係性を介し、当該の他 者の被った出来事への感受性sensibiliteを高め、その出来事と他者の対象性を認識し、何らかの内発的なきっかけ (引き金trigger)によって、その対象への近傍性を高め、当該に他者の置かれている現実からの解放への活動性を 生み出す。その活動は「分割＝分有partage」(Jean-Luc Nancy)しようとする潜勢的力を産出する可能性。

《補論》

似田貝等のこれまでの研究領域における運動者、被災者、当事者の《声を聴く》方法的展開

1) 似田貝等の「住民運動の論理」から、「支援の〈実践知〉」、「身体の声
を聴く」(「つぶやき」の分析)に至る
〈「語る」—「聴く」〉方法的展開(表1.
参照)

〈語る－聴く〉行為の方法的展開 未定稿

(似田貝香門)

	「言葉」(論理)	「声」	「つぶやき」
場所(空間)	運動・集会	支援活動	足湯活動
関係性	被害者相互・運動者 運動者と第三者 運動者と計画者	被災者と支援者 クライアントと職能者	被災者と支援者
研究対象	論理的な対話	意識された対話	自然の対話
公私の空間	「公共性」・「公共空間」 (J.Habermas)	「声とまなざしの場」 (A.Toutaine))	私的空間→ 「根源的公共空間」 (Hannah Arendt)
似田貝等の 研究領域	住民運動の論理 (新全国総合開発計画と全国の住 民運動；1970年～1978年)	自立支援の〈実践知〉 (阪神・淡路大震災 ；1995年～現在)	足湯ボランティア「つぶ やき」分析(東日本大震 災；2011年～現在)
方 法	〈主体を介しての構造分析〉 〈issue を介しての構造分析〉	〈語る－聴く〉 〈近傍からの接近〉 〈近傍に寄る〉	「身体の声聴く」 (Antonio Negri) 共感
研究書・論文等	『住民運動の論理』(共編著、学陽 書房 1976年) 「社会調査の曲がり角－住民運動 調査後の覚え書き」(『U P』24号 1974年、東京大学出版会)	『自立支援の実践知－』 (編著、東信堂 2008 年)、「〈実践知〉として の公共性」(盛山和夫他 編『公共社会学』東京大 学出版会、2012年)	「「つぶやき」分析のまとめ と今後の課題」(『寄り添い からつながりを』(震災がつ なぐ全国ネットワーク編、2 013年)
Keyword	公共性	〈実践知〉 〈出会い rencontre〉 〈共同出現〉 〈約束・関与＝責任 engagement〉	身体的「触れ合い」 「共感」 「受け入れ可能性 (acception)」

2) 身体論の展開

(1) 阪神・淡路大震災での身体論;

被災を被るという事態は、**人々の身体性をして、
自らが弱く、また苦しみを受ける、**という受苦性の認
〈受動的主体〉、〈可傷性vulnérabilité〉)

(2) 東日本大震災での身体論;

身体の変化から、被災者の〈声〉を聴く
〈「身体の声聴く」〉

→「共感」という方法態度

5 . 実 践 的 に 生 成 さ れ た テ ー マ

1) 受難者の自立を可能とする社会思想の共鳴盤

被災者の生きることへの関心（自存力 onatus）と、被災者の「つぶやき」を聴くという人間関係が、
〈共感〉という人格的・倫理的関係性をつくりあげたとき、
社会の仕組みとして、苦難からの解放という
共同のビジョンの共鳴盤を創造していく可能性
を生み出すであろう

《参考》

スピノザ（Spinoza）は、自存力conatusという概念で、人の自己保存の力の意義を論じた。

また、レヴィナス（Emmanuel Lévinas）は、『存在の彼方へ』（1978=1999）において、conatusとは、

「存在することへの不屈の固執として遂行される存在者の努力・傾動」、「存在に固執するとは持続すること」と、論じながら、同時に「自分に繋ぎ留められていて、逃れることができない」限界の指摘

2)。「共感」から社会の分析と社会の仕組みづくり(実践へ)

- ボランティアの「共感」能力がどのように高くとも、あらゆる対象に普遍的に適用可能とするのは、誤りである。
- 〈個の有限性〉、ひとの弱さ(可傷性 *vulnérabilité*)、それが故にひとは「弱い存在」であることも、
- リアルに認識できなければならない。

3) 分析結果は活動現場へ

(1) どのように学問的かつ実践的に使用できるか

→「つぶやき」の分析から「ガイドブック」作成

＊「つぶやき」分析から、こころの問題に関する「ガイドブック」の作成方法及びその作業の一端に関しては、
似田貝(2013)参照

・A. 被災者の中に心の問題を抱えた人を足湯ボランティアが見つける。

→ケア等の専門職へ繋ぐ。

B. 足湯ボランティア自身のケア←東日本大震災での実践的テーマの一つ、
《支援者への支援》

(2) また分析から、被災者自立に関する生活支援のテーマにどのように結びつけそれを支援する諸主体へにどのように働きかけるかを探索する

(3) 足湯ボランティアと被災者に関わる専門家(職能者)との協働関係の模索等を考えることにした。

活動は2つの方向で展開している

(1) ケア職能集団の連携；「出会う会」（宮城県仙台市）；① のAとB

ボランティア活動とケアの専門集団の、緊急的な協働関係構築と、支援者のケアというテーマが避けられないものとなり、兵庫県立大学看護学部・地域ケア研究所、宮城県臨床心理士会、東北大学寄附講座「実践宗教学」運営委員会・「こころの相談室」、支援者の支援TONONY（仙台；YWCA、みやぎ生協等）との連携を図り、2013年6月、東京大学被災地支援ネットワークも発起人となって、さまざまなケア活動が足湯隊と合同で活動することや、支援者のケアについて活動できるような準備に取りかかっている。準備会の名称は「出合いの会」（2013年6月創設）。既に7回の準備会（仙台市）を終えた。

《資料》「出会う会」の目的

今後の継続する支援を支えることを目指し、以下の願いを込めた会を開催する。

a.「2011年の震災による到達点」の確認

95年の震災は様々な意味で「支援」に関わる者の転機となった。今次の震災はどうか。95年の転機との比較を通じ、現在の到達点を確認したい。

b.「職能ボランティアの出会い」の提供

報酬を制度的に定めた「職業」があり、その職によって得られた能力を用いてボランティアに従事する「職能ボランティア」がある。この視点に立ち、多職能者の出会いの場を提供したい。

c.「支援者を支援するネットワーク」の展望

以上を重ね合わせ、支援者が互いに支援し合う基盤を創り出せればと期待したい。

(2) 足湯隊の再組織とケア職能集団との連携を目指して

- ・日本財団ROADO・震災がつなぐ全国ネットワークの足湯活動(2011年度～2012年度)
七ヶ浜、山元、陸前高田(モビリア)、遠野、東京、
- ・大学の足湯ボランティア活動の再組織化

《資料》

2013年

足湯ボランティア講習会・交流会(2013年8月;足湯講習会in岩手大学〔岩手大学・東北大学・神戸大学・岩手県立大学〕

02月17日(日)～02月18日(月)宮城県七ガ浜町足湯ボランティア「つぶやき」調査

東北学院大学へ足湯隊組織化依頼(七ガ浜町)

08月29日(木)10:00足湯ボランティア講習会in岩手大学(足湯隊組織化))

11月28日(木)震災がつなぐ全国ネットワークとの連携で足湯ボランティア＋ケア専門職との合同の活動の説明と打ち合わせ(東北大学学生ボランティア支援室)

12月07日～08日第5回全国足湯ボランティア交流会in岩手

岩手県教育委員会

協力:被災地 NGO 協働センター、東京大学被災地支援ネットワーク

神戸大学/大阪大学/金沢大学/北陸学院大学/東北大学/福島大学/東北学院大学

石巻専修大学/宮城教育大学/岩手県立大学/盛岡大学/富士大学/岩手大学

12月21日～23日 東北大学・岩手大学連合足湯隊(陸前高田モビリア仮設住宅)

2014年

02月17日(月)14:00渡辺日出夫(ADRA JAPAN)原宿中央教会

宮城県山元町足湯ボランティアとケアについて相談

03月19日(水)神戸 黒田裕子(足湯ボランティアとの災害看護系のケア活動の協働について相談)

03月22日(土)宮城県山元町ADRA JAPAN足湯視察

参考文献

似田貝香門、2008「用語解説」『自立支援の実践知－阪神・淡路大震災と共同・市民社会』（似田貝香門編著、東信堂）

似田貝香門a,2011「すきまの組織化－〈隙間〉にみられる動態的運動」（国際高等研究所『すきまの組織化』21～29頁）、

似田貝香門b,2011「〈隙間〉の組織化－相互浸透ダイナミズムを介した主体と構造」（国際高等研究所『すきまの組織化』33～46頁）

似田貝香門,2013「『つぶやき』分析のまとめと今後の課題」（日本財団RORD＋震災がつなぐ全国ネットワーク編『寄り添いからつながりを 震災がつなぐ全国ネットワーク 東日本大震災支援活動記録2』（31頁～37頁）。

西田幾多郎（『全集』）（XXI,p.566）

花崎皋平,1981『生きる場の哲学』（岩波新書）

Antonio Negri, Job, La Force de L' Esclave. traduit de l' italien par Judith Revel, Bayard, 2002。邦訳『ヨブ』p.84）

Jacques Derrida, Adieu－ a Emmanue levinas, Galilee, 1997（1997=2004 邦訳p.45）

Konrad Zacharias Lorenz『鏡の背面 人間的認識の自然誌的考察（上・下）』（思索社, 1974年-1975年）

382	自宅・財産	家が流された	家が流されて辛い
382	自宅・財産	家が半壊	家が半壊しているのを見るのが辛い
383	仕事・その他	借金	借金が残ってて辛い
383	仕事・その他	早く日常に戻りたい	早く日常に戻りたい
383	仕事・その他	早く日常に戻りたい	津波が来なかったら今頃普通の生活ができていた
383	仕事・その他	早く日常に戻りたい	自分たちが今までいかに幸せだったかを知った
383	仕事・その他	見通しがつかない	見通しがつかない
383	仕事・その他	故郷がなくなってしまった	故郷がなくなってしまった
383	仕事・その他	流されちゃった	大切な人や物が流されて辛い
390	涙	供養・葬儀の時に涙が出る	お父さん(ご主人)が流された時苦しかったんだろうなと思うと、涙が出る
390	涙	涙は枯れた	最近はずっかり涙も枯れてしまった
390	涙	気の毒で涙が出る	他の被災地のニュースを見ていると、気の毒で涙が出る
390	涙	勝手に涙が出る	
390	涙	毎日泣く	仕事を再開するまで毎日泣いていた
390	涙	思い出して涙が出る	よその家にお世話になっていた頃を思い出すと涙が出る
390	涙	泣けない	みんなの前では泣けなかった
390	涙	泣きたくない	
300	諦め	欲を言えばきりがない	欲を言えばきりがないから何もいらない
300	諦め	どうしようもない	いつまでこの生活が続くのか見通しがつかないが、どうしようもないとあきらめている
300	諦め	どうでもよかった	怒る気もなくなり、どうでもよかった
300	諦め	元の生活に戻れない	お店をやっていたが、もうあきらめようと思う。
300	諦め	もう住めない	原発の影響で、生きているうちには帰れないだろうな
300	諦め	もう住めない	店もなくなり友人もいなくなって、もうここには住めないだろう
300	諦め	放射能	放射能まみれのものを持って帰ることなんてできない
300	諦め	元の仕事ができない	船が流されて、もう漁業の仕事ができない

キーワードと例文の抽出（例：不活発）

20年働いた会社がつぶれた。最後の仕事が津波で壊されたし仕事場のそうじだった。全部できなくて、他のボランティアさんが片付けてくれた。**毎日、何をしてもいいか、わからないの。**

（2011/07/18 陸前高田 60代 女性）

昔は農家やってたんだ。・・・中略・・・今は放射能のやつで作ってないけど昔は色々作ってたよ。**毎日暇だよ。・・・中略・・・本当だよ。何もすることがないんだもん。**仕事もなくて、作られたもの食べてただけだからね。・・・

（2011/08/28 郡山 80代 女性）

言葉：暇 何をしてもいいかわからない 外に出なくなった

例文：寝るしかない することがない 動かなくなった

生活不活発病の可能性

？ 要観察

6. 次なる課題へ；

「ケア」行為と〈いのち〉の再生

—絶望から希望へ；非主体化・非時間から主体化・「生きられる時間へ」

「祈り」

- (テーマ; 諦め、断念に対する、無力性への**宗教的ケアの意義**について))

主体の軸で云えば、祈るより仕方ない。神の御心に委ねます。→「私」を前面に出さず、すなわち、非主体化。

そして、時間軸から見れば、諦め、断念をいつとき受け容れ(受け容れるしかない)、すなわち、過去、今〔現在〕、将来〔未来〕という時間性が非時間化される。

この非主体性と非時間性による、被災者の〈具体的、一時的、局所的〉な自律・自立への中断・〈未決定・未

完遂・停留〉という、モメント(時)と場(空間)の提供が、宗教的ケアの意義なのではないか。

このケア行為は、こうした自律・自立の「中断」はあれど、「少しずつde proche en proche」、「次第にde prochain

enprochain」、克服Überwindungではなく、〈耐えるVerwindung〉¹⁾ながら、時を得るまで、〈待ち〉続けられる。

この間、「ともに祈りましょう」という同伴者²⁾が不可欠(これが傍らにいる支援者)。

1)〈耐えるVerwindung〉、〈待つAttendance〉

近代的主体像たる能動的主体＝〈強い存在〉が、困難な問題に直面すると、克服Überwindung というモメントを主体論の中に織り込む。これに対し、受動的主体＝〈弱い存在〉は、これに対峙して〈耐えるVerwindung〉を主題とせざるをえない。この〈耐える〉行為は、被った事柄（受難）の解決の道が、未知なるがゆえに、〈新たな可能性〉を気長に〈待つ〉、持続性という行為選択を余儀なく行うことを免れない。

2) 似田貝香門編『自立支援の実践知』ではこれを、〈共に一あるetre-avec〉という様相として捉え、さらに一歩進んで、テーマや課題を持続させ、問題提起する共同関係を、〈共同出現〉と私たちは呼ぼうとしている。これが、〈弱い存在〉の主体性の様相である。

「つぶやき」と宗教的ケア（あるいはspiritual care） 非主体化・無時間化から再び主体化・時間化（再生）

「祈り」という行為が災害時に人々にとって意味することは何か、あるいはどのような期待が込められるのか、等をお聞きしたいとおもいます（宗教者にとっての大切な事柄、と思うのですが）。

「つぶやき」は、時空間の過去と現在と未来への、混交が見られます。また、断念・諦めによる、誰かに救われたい、という非主体化状況も散見されます。

このような事例は、「祈り」という行為に若干、類似している気もします。

ケアと宗教的ケアとの差異もまた大きなテーマでもあります。よろしくおねがいいたします

すなわち、切迫した事態、望ましい結果を選択し得ない(期待
的行為の不可能性)なるがゆえに、
強烈な願いにのみ収斂した(それが故に、過去・現在・未来の
時間性の混交あるいは無時間性)、時に、祈るしかないという
「私」を無化することによる、非主体化があり得るのでないで
しょうか。

ただ、「つぶやき」との相違は、この〈祈るしかない〉、という断
念・諦めが、神を介して、いま再び、「私」の固有性に循環する
(いのちが与えられる)、ことをにあるのかな、と思っています。

ケア；
奮う生命、生命活動の賦活

生活意思を回復し、持続しようとする意思を復権させること。

別言すれば、主体化・時間の再生という様相（運動）。

それは他者との根源的コミュニケーションが不可欠。時間的リズムの流れの力動性は、自己組織系のあり方、とりわけ主体形成（主体回復）の大きな鍵となりよう。

〈渦〉というmetaphor

1) 運動・活動の広がり・深化

2) 知の運動

〈ミクロ出現〉の新たな出来事、出来事の連鎖を、捉えるテーマや概念の〈渦〉現象、すなわち、既存のテーマや概念の一種の「概念運動」(テーマ・概念の転釈、「ずらし」、再生)が生成する。

似田貝の例示;

- ・経済Economy;「経済合理性」によって一義的に捉えられた概念を、「社会の中に埋め込まれた経済」

- モラル・エコノミーmorals economy、ボランティア経済圏

- ・蘇るテーマ;

- 職能と市民社会、職能と連帯

- 職能ボランティア(職業と職能の弁別)

- ネットワーク

- 道具的視点へ変化したものを、根源的コミュニケーションの関係性概念へ再生

- 新たなテーマ;異なる主体間の新たな社会関係の出現

- 異なる主体の共同性、差異の運動による共同の捉え方

- 分割＝分有partage (Jean-Luc Nancy)

・ 動態的多様性

1) 多様性を運動（社会的力の形成）として捉えるという着想

〈ミクロ出現〉；相互作用（相互行為）

2) この運動系の動的な概念群

共振 引き込みentrainment

巻き込む力；involvement

相互作用

